

本書の主人公ピエール・ジュール・エツツェル（1814—86）は、まさにそうした傑物だ。パリの書店での修業を経て、出版社を始めた彼は、コレクターズアイテムとして名高いグランヴィールの挿し絵本でいち早く成功を収める。彼は文才も非常に豊かであり、バルザック、ジュール・ヴェルヌなどと、P・J・スタールの筆名で作品を寄稿している。ところが、この御仁、政治家として

Book Review

『名編集者エツツェルと巨匠たち』
フランス文学秘史』
私市保彦



新曜社 5775円/きさいち・やすひこ 東京都生まれ。武蔵大学名誉教授。専攻はフランス文学・比較文学。著書に『ネモ船長と青ひび』『幻想物語の文法』、訳書にヴェルヌ『海底二万里』など。

でも能力を発揮、2月革命ではラマルティエヌと交渉を行い、臨時政府の要職にもつき、第2帝政期には、一時、亡命を余儀なくされる。同じく亡命中のヴィクトル・ユゴーの作品の国際出版のために奔走し、その名声を高めたのも、彼の功績だ。後年は、パリ・コミューンに参加して逮捕された知識人たちに、

援助の手を差しのべる。

ストラスブル大学で学び、その地でドイツ・ロマン派のファンタジーにふれた彼は、児童文学の出版も推進する。翻案に長けた編集者・作家として、わが国の鈴木三重吉に例えられているのが興味深い。そんな彼が発見した才能が、ジュール・ヴェルヌで、自社の雑誌に、『海底二万

19世紀フランスの文学と社会を活写

評者 宮下志朗
東京大学教授 フランス文学

「洋酒天国」は小さな雑誌だった。「トリスタール」で配るマッチ代わりに、「サントリー」が刊行していた。1956年から64年まで。私が生まれたのは終刊より10年ちよつとあとなので、この伝説の雑誌が帯びていた熱に直にふれてはいない。自分より年長で、雑誌や本に携わっていて、少しでも志が高い人はしばしばその誌名を口にす。いつも黙って聞いていた。

Book Review

『「洋酒天国」とその時代』
小玉 武



筑摩書房 2520円/こだま・たけし 早稲田大学参与・教育学部兼任講師、石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞事務局局長、戸板女子短大評議員・非常勤講師。1938年、東京都生まれ。

「洋酒天国」とその時代』によると、創刊号にあつた挨拶文は短く、こうしめくくられていたという。「お読みになつて何がなし心なごむ そんな頁が一頁でもあるようならたいへん幸せです……」。品あり、意外なほど控えめな、いい文章だ。もつと気難しいたはずまいを

活躍が書かれている。そして、サントリーの屋号が「寿屋」だった時代からの社長で、彼ら仕事の土壌がやわらかく豊かであるように保つていた、佐治敬三。加えて、『暮しの手帖』初代編集長の花森安治、独特の随筆が素晴らしい吉田健一、植草甚一、時代小説で名高い山本周五郎、などなどの面々が入り代

わり立ち代わりあらわれ、パーティーのようにはなばなし、かつ、めまぐるしい。その中に開高健の名前を見つけると、決まってわくわくする。創刊にこぎつけるまでの、真つ白なペーシに向かう高揚と緊張を最もよく知る存在だと思ふからだろう。作中で幾度もとりあげられる彼のルポルタージュの名作

「ずばり東京」を読み返したいが、持つていた文庫版は5年程前に誰かに貸したまま行方不明なだった。しかも、もう絶版ときている。あきらめきれずに本屋の棚を凝視しに行くもやはり見つけれず、気分がおさまらないので、随筆集『開口閉口』を買う。部屋に帰つてきて、『洋酒天国』とその時代の表紙を眺めていて、この本は、60年代の熱気をそのまま包んだ文章をあらためてたどつてみようと思わせる、読書の門にもなっているのだな、と気がついた。巻末には『洋酒天国』全61号の目次も載っている。お酒そのものについて書かれた項のあいだ、こんな見出しに目が留まる。「ランコ人生はたのし」「古い家」「珈琲が惚れ薬になるということ」。お酒で満たしたグラス、小皿の上に肴、という風景に添えるのにふさわしい文章であるにちがいない。

評者 木村衣有子 文筆家

「夜の岩波文庫」をとりまく群像

読書空間

厚めのこの本の中には、『洋酒天国』制作の核となつた開高健、山口瞳、柳原良平の3人の